

◇連研履修者研修会開催

去る一月二十六日(日)、西本願寺高岡会館において連研履修者研修会が開催され、今年度に連研を終了した糸岡組・射水組・氷見組の履修者が参加した。

この研修会はその年の組連研修了者を対象に、連研のまとめと中央教修を受講していただくための事前研修として開催されているもの。

午前の部では連研を受講した動機と連研で学んだことの再確認についての話し合いを行い、その後講師の城野至界さん(連研研修講師)より「門徒推進員養成の願い」と題して、なぜ連研と門徒推進員の養成が必要だったのかについての講義があった。

城野さんは、親鸞聖人の教えに反して部落差別に加担し、差別的な制度も存在していた教団の内実を改めていこうとはじめられた同朋運動と、戦後多くの門信徒が新宗教に移り、教えの空洞化が表面化したことから「名ばかりの門徒、形ばかりの僧侶」ではなく、本当に教えに生きる人を育てようとはじまった門信徒会運動の二つが連研・門徒推進員養成のはじまりであったとされ、その上で、それは寺院の経営基盤の強化や護持運営のための人材育成ではなく、自分の生き方を教えに問い聞き改めていく、私たちが抱える諸問題に向きあつていく人を育てるためのものであったとした。

午後の部では「み教えを聞いたら生き方が変わるのですか」というテーマで射水組門徒推進員世話役の肥田智子さんより問題提起があり、肥田さんは「一番何が変わったかと言われれば、自分や人に対するものの見方が変わりました」「ともすれば損得や上下関係など自分の都合や価値観だけで人を見る、物事を判断するというだけではない生き方を知らされたように思います」「本当に大事なことは何なのか?と今までの在り方に疑問を持つようになりました。そ

れが生き方が変わるということだと受け止めています」と提起され、それを受けて履修者と運営スタッフによる熱心な話し合いが行われた。

全体会の講師助言では「人間誰しも他者の苦しみ悲しみに共感する力は持っていますが、そのことを大事だとは思えないのも人間です。その価値観を転換し、他者の苦悩に目を向ける感性が磨かれるのが仏の教えです」「何をしたらって差別はなくならないとする言説がありますが、自分がそれまでの自身の差別的な言動を見直すことで、少なくとも自分がやってきた差別は無くなります」「救いにあう、教えに出会うとは、自分のそれまでのものの方、間違いが正されていくことであり、それは自身の言葉や行動を見直していくことにつながるでしょう。それが生き方が変わるといふことだと思います」と助言された。

全体会終了後には中央教修への参加奨励として砺波組門徒推進員世話役の宮川秀雄さんより中央教修の体験発表があり、「中央教修に参加して目が開かれるような思いでした。私は特に差別問題に取り組んでいこうと思ひ、それを決意表明にしました。皆さんにもぜひ中央教修に行っていたくださいと願います」とご自身の体験をもとに履修者の方を激励され、閉会した。

☆まことの保育研修会が開催される

一月二十五日(土) 午後から教区保育連盟(中西智浩理事長)の加盟園に所属する保育士及び教諭八十八名が第二回まことの保育研修会に参加した。この研修会は法話等の仏教に関するお話を聞く機会が欲しいという仏教保育園や幼稚園の先生方の声を受けて開催され、法話中心の研修会が年二回行われている。今年度二回目の研修会は、栗山宣雄さん(川上組・本福寺住職)が「なぜお念仏なのか?子供たちに伝えたいこと」というテーマで法話を行った。

始めに各園が持ち回りで行っている仏参は、戸出西部保育園（五十田秀道園長）の先生方が献灯・献華・献香やお勤めを行った。

その後研修会（法話）が行われ栗山さんがお話をされた。始めに「わかりやすい話とはみんなが理解できる言葉のことであるが、わかりやすさの罨がある」と言われ簡単な話は聞き手の都合の良い解釈によって誤解を招く危険性があると言われた。そしてお経には物語が書かれていると説明し、お釈迦様と阿弥陀仏（法蔵菩薩）との関係や物語の大切さについて話された。

また、「阿弥陀という仏様は、私を待ち続ける」仏さまであり、私を絶対あきらめない仏さまである」と述べられ、自分を認めてくれる方（阿弥陀仏）が絶対に待ち続けていることを私が確信できたら人生は生きやすくなるとまとめられた。次年度も年二回の研修会を開催し、法話を中心とした研修を行う予定である。

★高岡教区仏教婦人会新年会開催

去る一月二十八日（火）午前十一時より高岡教区仏教婦人会連盟の新年会がニューオータニ高岡にて開催され、会員・来賓八十八名が参加し、交流を深めた。

新年会に先立って讃仏偈のおつとめと教務所長の法話がなされた。新年会では余興として氷見東組仏婦、鏡内幸子さん所属のうしお新舞踊研究会による新舞踊「幸せ古希祝」と「寿」の披露と執行部による流行歌「パプリカ」に合わせた踊りの披露があり、会場は大いに盛り上がりを見せた。最後に参加者全員にチューリップの花が一輪手渡された。

◆青年布教使研修会開催

去る一月三十一日（金）、西本願寺高岡会館礼拝堂において、青年布教



使研修会が開催され、「多様化する社会に僧侶としてどう向き合うか」をテーマに、青年布教使・寺族青年会会員が参加し学びを深めた。本研修会は第二連区青年布教使会に向けてのプレ研修として開催されているもの。

講師の栗山宣雄さん（川上組本福寺住職）は今回のテーマの切り口となっているLGBTQ（同性愛・両性愛・体の性と心の性が一致しない人・特に決まった性自認を持たない人等の性的少数者の総称）の問題について解説され、日本ではLGBTQは「奇異で特別な存在」としてテレビタレントなどで商品として扱われていることを指摘された。

また、私たち僧侶がこの問題に対してほとんど学びがないために、世間と同じようにいわゆるステレオタイプ（世間で流布している固定化したイメージ。必ずしも実態を反映したものではないため、思考を省略してイメージに基づいて誤って認識・判断してしまう）的な偏見を持って捉えてしまっているのではないかと指摘された。

協議会では、「身近にいないので実感を持ちにくい」という意見や、「今の地域社会でそのことを告白すれば居場所がなくなるために、本当は身近に居るけれども言えないだけではないか」「LGBTQは今でも漫画やアニメなどあらゆるメディアで面白おかしい存在として扱われている。私たちもその偏見の中にあるのではないか」といった意見が出された。

また、去る二月四日・五日にかけて石川教区金沢別院において第二連区青年布教使研修会が開催され高岡教区からは六名の青年布教使が参加した。講師の古川潤哉さん（日本思春期学会理事・佐賀教区松浦組浄誓寺衆徒）は「多様化する社会に僧侶としてどう向き合うのか」というテーマを設定したねらいについて触れ「社会が多様化したのではなく、今までは元々あった多様性を黙殺してきただけ、というのがこのテーマの基本的視点です」と説明され、寺院や僧侶もその地域の道徳規範者として、LGBTQなどの多様性を認めず、それらの人の声を押しつぶす同調圧力の側に立っていたのでは、と指摘。また、僧侶には法的にみても守秘義務があるが、僧侶にはその意識が低いいため、相談相手になりえない、とLGBTQ問題に限らない僧侶の体質的な問題を挙げられた。

その上で「道徳では人は救われない。善し悪しで判断するのではなく、共感と理解を示す、そんな人が僧侶という存在であってほしい」と述べられた。

◇御同朋の社会をめざす運動のコーナー

傍観者であること、何が問題なのか？

先日開催された第二連区青年布教使研修会に参加してまいりました。連区の布教使研修会・青年布教研修会ではテーマとは別に「同朋研修」の時間が設けられております。これは布教の場において差別に加担し、温存させるような数々の差別法話がなされてきた反省から設けられたものであり、布教団連合から出向する同朋講師が担当するものです。今回同朋講師としてご出向いただいた宮崎教区の登尾唯信さん（宮崎組松尾寺住職）が、差別問題を考える上で非常に重要なポイントとなる資料をご用意されていたのでご紹介したいと思います。

「カンケイない？」と題されたこの資料は、ある部落出身の方の高校生の実体験に基づくものです。この方は「クラスの中で日常的に話されている部落や障がい者に対する否定的な内容について話し合う時間が欲しい」と担任に掛け合い、紆余曲折を経ながらも、ようやくクラス会で話し合う機会を設けることができました。以下、引用いたします。

「そのときに、とっても信頼していた男友だちが、『俺は部落ということには気にしないへんけど、恋愛でつき合うとなると親兄弟は反対するやろうなあ』と発言し、また、あまりつき合いないクラスメイトは、『そんなん、あんたが部落でも気にしないへんよ。そんなん、みんな同じやねんから、あんたも気にせんとき』と言ったのです。」「そのとき、私は、猛烈にショックをうけたのです。それは、中学時代から長くつき合ってきた男友だちの発言も、ほとんどつき合いのなかったクラスメイトの『励まし』の言葉も同等だったからです。」「(中略) この二人の友人に差別意識があるかどうかはわかりません。現に、差別表現はなかったからです。なのになぜ、心が張り裂けそうになるくらい、悲しかったのか？」(引用ここまで)

なぜ、この方が友人二人の発言に猛烈なショックを受け、心が張り裂けるような悲しみを覚えたのかわかりますでしょうか。一言でいえば、

著しく当事者への共感を欠いた、傍観者としての発言でしかない、ということ。

この友人二人は「自分は(その人が)部落出身だろうと気にしない。そんなことは関係ない」という自分の立場を述べているだけで、その方の置かれている境遇や、差別を受けている現状に対して全く目を向けていない、ということ。クラスメイトは「あんたも気にせんとき」と「本人の心の持ちようの問題」という程度の受け止めであり、特に、信頼していた男友だちは「親兄弟は反対するだろう」と自分の家族の持つ差別意識に対しては全く問題にせず、きわめて傍観的な態度です。親しい友人であつても、あくまで自分には無関係な問題であるという程度の認識が見て取れたことが、この方にショックと悲しみを与えたのです。

この例からも分かるように、傍観者になるということは差別を容認し温存させる、差別への加担行為と同義であり、被差別者を深く傷つける行為なのです。このような一見理解を示しながらも実は傍観的な態度を示しているに過ぎない、というのは、私たち自身も無自覚のうちに陥りがちな、厳に戒めなければならぬ行為であると言えます。

登尾さんは、己が身に引き比べてという釈迦の言葉を引用し、自分の身に引き当てて考える「当事者性の理解」という表現で、他者の苦悩への共感の重要性を挙げられ、そのためには差別の現実からの学びと、その学びを深めていくこと何より重要であると指摘されました。これは部落差別問題に限らず、あらゆる問題に当てはまるのではないのでしょうか。

法蔵菩薩があらゆる人々の苦悩を知り、共感しようとするところから出発したのが仏説無量寿経であり、浄土真宗の教えでした。その教えをよりどころとする私たちは、社会にあふれる苦悩にどのように向き合うのでしょうか。混迷を深める社会状況ならばこそ宗教者としての私たちの姿勢と覚悟が問われているように思えてなりません。

【高岡教区教務所・教区主幹 岡西好持】

◇これからの日程（2/14～3/14）◇

2月	教区・財団行事	教化団体・組行事
14	常例法座 教学研究室企画会議	
15		門徒推進員研修会
18	聖典セミナー	矯正教化支部打合せ～19日（岐阜）
19		連区職員研修～20日（岐阜）
22		ビハーラ研修会
23		仏壮ボウリング大会
26		長寿苑ビハーラ活動 連研のための研修会
27		北陸B 講員研修会～28日（磯はなび）
28		組主幹会議
3月		
2		第2B 総代研修会（新湊） 仏婦執行部会
3		第4B 総代研修会（ひみのはな）
4		第1B 総代研修会（会館）
5		同朋委員会
6		同朋養成研修会
9	常備会	
11		第3B 総代研修会（砺波）
12		寺院女性会役員会
13	教区常任委員会	仏婦常任委員会 富山龍谷教学会議例会（富山）
14	常例法座	

☆義援金送金のご報告☆

昨年末、令和元年八月の前線に伴う大雨災害義援金（佐賀教区）及び台風十九号の被害に対する義援金を佐賀教区には105,002円、東北教区・東京教区・長野教区の三教区には、それぞれ272,959円ずつ送金しましたことご報告申し上げます。

ご協力ありがとうございました。

ラジオ放送～西本願寺の時間～

『みほとけとともに』

北日本放送（KNB）・738kHz.

◎毎週土曜日（本山制作）午前6:15～6:25

□第2・4日曜日（富山・高岡制作）午前6:00～6:10

◎2/22（土）：久留島 法暁氏

（本願寺派布教使・広島県圓正寺衆徒）

「お寺への入り口」

□2/23（日）：吉井 教潤氏

（高岡教区）

◎3/2（土）：久留島 法暁氏

（本願寺派布教使・広島県圓正寺衆徒）

「笑える場所、安心できる場所」

◎3/7（土）：若林 唯人氏

（本願寺派布教使・光照寺衆徒）

「仏さまのお慈悲」

◎3/8（日）：未 定

（富山教区）

◎3/14（土）：若林 唯人氏

（本願寺派布教使・光照寺衆徒）

「私を包み込んでくださる阿弥陀様」

◎3/21（土）：若林 唯人氏

（本願寺派布教使・光照寺衆徒）

「はじめまして仏教」・最初の一步を」

【西本願寺高岡会館3月の常例法座】

ご講師：瀧山志穂氏

（高岡教区氷見西組願正寺）

ご講題：「未定」

午後1時20分頃からビデオ上映、2時からお正信偈六首引のお勤めです。どうぞお誘いあわせてお参りください。